意見交換の概要
（平成 30 年 6 月 8 日(金)・今治市総合福祉センター）

１．警察と連携した今治市での青パト隊の活動について

ＰＴＡ連合会として、青パト隊を結成して子どもたちの安心・安全のため見守りをしており、親はもちろん地域の方を巻き込んで活動している。ただ、今治市は合併してから旧市街、山間部、島しょ部となり場所もすごく広くなり、地域によって子どもの見守りの温度差もある。青パト隊としては中学校校区で１校ずつ結成させてもらっているが、青パト隊の結成には管轄の警察署の協力をいただくことになっていて、旧市内と山間部は今治署でお願いして青パトの許可証みたいなものをいただけるが、島しょ部は伯方署管轄になる。こうなったときに今まだ連携が取れていないところがあって、今治市の連合会として青パトの活動をしたいときにどうしても島しょ部が伯方署管轄になることでなかなか話が進みにくいところがある。

何か、今治署と伯方署をうまくつなぎ合わせて今治市の青パトの子どもたちの見守りという形で持っていく方法はないか。

【知事】

これは警察の管轄の問題になると、ちょっと私の手から離れてしまって、予算の面についてはこちらでもやるんですが、具体的な対策は警察になってしまうので、こういう意見がありますよというのは責任を持って警察のほうにお伝えさせていただきます。

青パト隊についてですが、僕は今の仕事の前が松山市長の仕事をさせていただいたときに、実は見守り、青パト、どうすればいいか現場で議論した経験がございます。

当時、平成 14 年ぐらいだったかな。そのころ不審者が非常に多い。刺激されて多くなるのかもしれないけど、社会的な問題になった時期があったんですね。なかなか子どもたちの安全・安心を守るというのがうまくいかなくて、地域ごとに松山市もばらつきがあったんです。これは青パトだけの問題ではないと当時判断して、まちづくりという観点で位置づけていかなければならないかなと考えています。当時、今治以上に松山市は人口が多くなって隣近所のつき合いもない、コミュニティも崩壊する、そんな状況が非常に大きな悩みでした。でも、これからの世の中を考えていくと、やっぱり地域のコミュニティというのは非常に大事だなと思って、でもこのままだと全然進まないですから、どうすればいいか議論したんです。将来の地域を担う人材は誰か。それは子どもたち。不審者情報がこれだけある中で、それを守るというのは、親の責任でもあり、地域の問題でもあり、その地域にある企業の問題でもあり、そして行政の問題でもある。まずここを位置づける。そうすると、その呼び掛けに応じてくれたら今まで全く地域の活動に関心のなかった人も出てきてくれる可能性がまず第一だと。その次に出てきてくれるコンテンツは何かと考えたら今度は防災だと。防災というのは我が身を守る、家族の命を守るということになるので、こちらもあわせて兼ね備えていくと、また人が出てくる。最終的に一番根っこにあるのはまちづくりではないかと考えたんです。

となると、まちづくりというものをまずベースにスタートさせて、その中で皆さんがそれぞれ考えて子どもたちを守ろうとか、防災どうしようとか。単発ではなくてトータルで考える仕組みができたら地域の取り組みの状況は変わっていくのではないかと考えたんです。条例をつくりました。まちづくりの条例をつくってまちづくり協議会というのを結成していただきたい。行政も手伝います。学生も手伝います。その代わり地域の皆さんが主役になるということ。皆さんが主役になって、我がまち、校区ぐらいの単位だったんですけど、我がまちはどうあるべきなのか、どう将来を考えるのか計画をつくってもらう。２年ぐらいかけて計画をつくってもらうんですね。土曜日とかにみんな集まってああでもない、こうでもないといろいろな議論を

戦わせて、そもそも我が校区がどんなところかもう１回まち歩きをしてみんなで確認しようというとか、そういう動きをして、２年間かけて計画ができてきた。その計画を具体化するために組織をつくる。まちづくり協議会というのがあって、その中に分科会でまさに青パト隊の問題とか、ごみの問題とか、自主防災の問題、いろいろな分科会ができて、それをみんなでやっていこうという雰囲気ができたなと思った。いわば計画と組織ができたときに、松山市のほうからその団体に対して、まちづくり協議会に対してお金をポンと渡したんです。その範囲でどうぞ自由にやってくださいと。最初は行政の仕事を押しつけるのかとかなり怒られたんですが、違うんだと。そもそもまちづくりの仕事は市民の皆さんが自分たちのこととして考えていただいて、行政がそれを徹底的にサポートするというのが理想なんじゃないでしょうか、それをやりたいということで。しかも強制ではないです。やりたいという地域、手を上げてくれた地域を優先的にやりますという方針でやっていたんですけど、今僕もちょっと離れてしまいましたけど、40 校区のうち 20 校区以上は結成されています。

ただ単に青パト隊だけではなくてまちづくりの中でみんなでやる。その中の１つの事業だとなると、かなり充実した取組みにつながるので、ちょっと参考までに考えていただいたら面白いのではないかと思います。ただ、上島にしても今治にしても、それぞれの地域のまちづくりの方針がありますから、事情も違うと思いますので、今の方針がそのままやるかどうかは議論する必要があると思いますが、より密度を濃くするためには、まちづくりの流れの１つと考えて進めていったほうがいいのではないかと個人的には思います。

（参加者）

今、知事がおっしゃられた地域が活性化するところ、青パト隊が充実しているところは防災のほうも実は充実しているんです。校区内の地域のつながりもすごくいい状態。子どもたちやお年寄り、地域のつながりもすごくいい。今治市内でもそういうところがだいたい多くて、そのあたりの地域ごとのあれを、言わば今治市のＰＴＡとしてはいいところを教えてもらったりとか、聞いたりとかして活動しているところでもあります。

青パトについてはいろいろな諸問題もあるんですけれども、地域との関係ということで、すごく考えさせられました。ありがとうございました。参考にさせてもらいます。

２．保育所の質の確保について

幼児期の教育や保育、地域の子育て支援の量の充実や質の向上ということで、子ども・子育て支援新制度というのが平成 27 年４月からスタートし、保育所保育指針は平成 30 年４月から改訂された。２年前に「保育園落ちた。日本死ね。」というあるお母さんの投稿から保育所は注目され始め、子どもを取り巻く制度、その他、いろいろと変わってきた。そのころから保育所は３Ｋの仕事とか、そういうふうによく言われるが、私自身はそんなことはない、これから育っていく子どもを預かる責任のある仕事で、本当にやりがいのある仕事だと思う。処遇改善というシステムもでき少しずつ改善されており、職員もそのためのキャリアアップの研修を重ねている。

しかし、保育所に入れない待機児童問題というのはまだまだ解決されておらず、特に低年齢の０歳児、１歳児というのは深刻な問題である。保育所の保育というのは、生涯に渡る人間形成の基礎を培うもので、子どもの健やかな健康、健康な育ちを支える質の高い保育の機会を保証することが不可欠だと思っている。小規模保育所などたくさん数が増えており、規制緩和というとすごくいい言葉に取られるが、ややもすると質の低下を生み出しかねないところがあると思う。本当に大事な子どもなので、大事に育てていただきたい。

【知事】

まず、保育士さん、もう１つ大きなのが介護士さん。子どもさんとお年寄り。本当にニーズが上がっている一方で処遇の問題がある。これは国にも知事会とか市長会とか町村会で毎回言っているところなんですが、少しずつは改善されているのですが、この状況で安心して人材が入ってくるにはまだまだそんなレベルではない。ただ、処遇のお金の問題は国の仕組みの問題になるので、これは言い続けるしかないのですが、国においては限られた財源の中でどこにどういうお金の使い方をするかというのは、まだ本当に硬直化している状況なので、考えるべきときがきているのかなと。もっと言えば、より一層それを進めないともたなくなると思います。

例えば、今の人口構造を見ますと、皆さんもうすうすお感じになられていると思いますが、かつては福祉サービスを必要とするお年寄りが少なくて、稼ぐ若い人が多いというピラミッド型の人口構造がドラム缶型になって、そして今は逆ピラミッド型になっています。ところが今の日本の年金制度も保険制度も社会福祉制度も全部ピラミッド型人口構造をベースにつくられていますから持つわけがないんです。持つわけがないとするならば、なんとかしないといけない。今は借金を増やしてなんとかカバーしているのが実態といったところです。でも、それはいつか限界がくる。だから抜本的な改革をして何が必要なのかというメリハリをきちんとやらないと、国の制度そのものが崩壊してしまうという状況が来ている気がします。ただ、難しいのはここに踏み込んでいくと、耳障りの悪いことも言わざるを得ないことができてくると思います。単純に考えると、今の時点で普通のサラリーマンがお給料をいただくと、だいたい保険や年金や税金の天引きで 38 から 40%が取られると思います。ということは、自由になるお金が 61 から 62。今の制度が何にも変わらない。よくもならないし悪くもならない。ということで、20 年、30 年月日が流れるとサービスを必要とする人はもっと増えていきます。少子化で稼ぐ世代はどんどん減っていきます。となると、今の 38 から 40 という負担をどれだけ上げないと持たないかという試算が出ています。70 まで上げないと維持ができない。これははっきり出ているんです。

じゃあ、それをカバーするためには方法は３つしかない。１つは 70 もそんな負担ができるかいな、というんだったら別の方法で負担していただく。税金を上げる。消費税を上げるということでカバーするか、あるいは支出を減らす。もう無理だから、サービスは削るだけ削ります。というふうにするか、どっちもみんな嫌がるんです。どっちも嫌だとするならば、新しい第三の道を模索するしかない。そこの鍵を握るのがさっきテーマに出たコミュニティなんです。地域ごとのコミュニティを色濃くして助け合っていく社会。そして足らざるところを制度でカバーするという仕組みを進めなかったら乗り越えることはできないと思います。そこで必要なところの人材はどこなのかということをきちんと精査して、その人材に来ていただくためには優先順位で処遇の問題も含めてどうするかという議論を本当は国会がしていただかないといけないけれども、耳触りの悪いことを言ったら、票が減りそうだからやめとこうとか。それでずるずるいっているというのが今の現実だと思います。

まずそこを押さえた上で、個々のお話をさせていただきたいのですが、まず待機児童というのは、これは市長時代にすごい頭の痛いテーマだったんです。例えば、４月の時点で待機児童が 200 人いますと報告を受けるんです。２年計画で０にすると言って、その年に 150 新しくつくりました。単純に言うと、200 人待機児童がいて、150 増やしたから年末には 50 かなと思ったら 300 になっているんです。どんどん増えていくんです。減ることは決してありませんでした。あるとき、問題発言になるかもしれないですが、１回試しにやってみようということで、あるエリアの待機児童の多いところに、申し訳ないけどお母さんたち、70 人くらいかな、就業証明書をちゃんと提出してくださいと言ったら、５割に減ってしまったんです。要は遊ぶためにという方がいるんだなということ。これは証明はできないんです。でもそのあまりにもすさまじい激減の仕方を見て、えっと思った記憶があるんです。そういったところ、本当に必要なところ。特に０才児とか、そういうところは深刻だなというのは受け止めていますので、そこ

をしっかり見極めて効果的にやっていくというふうなことも必要なのかな。数字だけにとらわれるのではなくて、地域ごととか、

あるいは簡単に解決する方法は１つだけあるんです。というのは、今の保育所というのは、国が全国標準のルールを決めていますよね。北海道という広大な土地を持っている場所でも人口密度が高い東京でも同じルールで保育所を設立するときには１人当たり何㎡で掛けることの最低定員何十人。全く一律なんです。ところが、例えば１人当たり 3.3 ㎡だったか、ちょっと忘れたんですけど、3.3 よりうちの地域は 3.1 ㎡で大丈夫ですと、責任は持ちますという地域が言えば、それで定員は上げられるんです。ところが 3.3 でなければいけないという厳格なルールになっているんで、それができないんです。責任は地域がちゃんと取るんで、地域で議論して 3.1 でいいとみんなが言うのであればそれでいいじゃないかということをずっと主張しているんですけれども、こちらのほうは若干規制緩和したほうがいい分野かもしれないです。確かに規制緩和というのはもろ刃の剣だと思うんですけど、そういったちょっとした工夫で解消できる方法はあるので、しかもお金はかからないですからね。そんなことを我々も現場の声として上げつついきたいと思っています。

≪補足説明≫〔保健福祉部〕

保育の質の確保については、学生への修学資金の貸付や保育士・保育所支援センターの潜在保育士への再就職支援等により保育士のなり手を増やすとともに、処遇改善や保育士の負担軽減による離職防止に取り組んでいるところです。

また、待機児童の解消のためには保育所等の受け皿整備も必要であり、保育所における保育室等、居室の床面積基準については、地価の高い大都市圏や待機児童の発生状況等を踏まえて指定された一部地域については、「従うべき基準」から「標準」に緩和されるとともに、今年度より、幼保連携型認定こども園についても同様に緩和されたところですが、本県については一部地域に指定されていない状況です。

３．子育て世代の家庭に対する企業サイドの意識改革について

子育て支援ということで、先ほど知事も言われたように、２人目の子どもさんには紙おむつを支給するとか、そういう制度がたくさん出てきている。お母さんや保護者の支援はすごくたくさんあるが、しかし、これが本当に子どものためになる支援か。保育所施設としては、保育所に預けていたらお母さんが安心して働けると言われるとほっとするが、保育所に預けてお母さんが１日中ずっと仕事をしていることが子どもの成長にマイナスになることがあるのではないかと常に思っている。企業サイドで、子どもを育てる時期にはもう少し時間短縮とか、子どもが病気のときにはちょっと早めに帰れるシステムとか、もちろん基本制度としてはあるが、職場の雰囲気としてなかなか子どものために帰れるような状況ではないところが大きいのではないか。本当に子育て世代の家庭に対する意識改革が必要とされているのではないか。親子の絆は小さいときにある程度できてくると思っており、子どもの笑顔が大好きで子育てにやさしい愛媛をつくっていただきたいと思い提案をさせていただいた。

【知事】

もう１つは、愛媛県は子育て支援ということに関して、先ほどの紙おむつだけではなくてもう１個やっていたんです。今の若い方々は、割と気楽に妊娠・出産・子育て期、相談できる相手がいないという状況が生まれています。ですから、相談窓口というのはすごく大事になってきているんですが、役所の相談窓口を今の若い世代の方々から見ると、敷居が高いそうなんですね。なかなか行けない。じゃあ、どうすればいいのかなと聞いたら、今の世代の人はこれな

んです。子育て支援アプリケーションというのをつくろう。“きらきらナビ”というのをつくったんです。今、登録が 7,000 人ぐらい。

（企画振興部長）

１万。１万近いです。

【知事】

１万近いです。これはどういう仕組みになっているかというと、スマホで何月何日に子どもが生まれましたと登録するんです。すると、１週間目には自動的にメールが来て、「１週間経ったけど、こんなことを忘れていませんか。こういうことをきちんとやりましたか。」というアドバイスが定期的にタイムリーに送られてくるんです。もちろん個別の相談もアプリケーションでできますし、それからもう１つは子育てイベントの開催情報が送られてくるんです。そうすると役所には敷居が高いから行けないけど、このイベントは同世代のお母さんたちが集まる会だったら、行ってみようかしら。そこに行くとママ友ができたり、そういうことがこのアプリケーションが子育て支援の力として生まれてくるのではないかということで、今、こういったことをやっていることをお知りいただいたら幸いです。

最後に、そうは言っても一番大事なのは、できれば職場がおっしゃるように出産・子育てに十分な配慮をして、職場ごとに環境が整っていくのが理想だと思いますので、そこで出てくるのが働き方改革だと思います。よくいろいろな地域でイクボス宣言とかブームになりました。僕はちょっとあまのじゃくになるところがあって、ほかがやったことをそのままやるのは嫌なんです。イクボスはみんながやっているから嫌なんで、県の女性職員に何かアイデア出してと投げ掛けたら、“ひめボス宣言”ということが出てきました。これは何が違うのと聞いたら、通常のイクボスプラス地域に貢献しようという視点を入れたんです。何て言うんですか、子どもさんが生まれたら、それを認めサポートする、理解する。これがイクボスなんですが、そこに地域のためにも頑張ろうという視点を入れるのがひめボスですと。これは全国どこでもやっていないし、“ひめ”は愛媛でしか使えないですから、これはいいというので、“ひめボス宣言”というのをやりました。今、それを大々的にアピールして、愛媛県内の市町は全部通していただいて、企業にもどんどん、どんどん、ひめボスを一緒にやりましょうと増え続けていますから、そういうところから空気が生まれてくると思いますので、これは本当にずっと続けていきたいと思っています。

≪補足説明≫〔県民環境部〕

平成 29 年１月の知事のひめボス宣言を機にスタートし､2 月には全市町長と合同宣言を行い、連携して民間への波及に取り組んでいます。

平成 30 年 11 月末現在、ひめボス宣言事業所は 706 事業所に拡大しており、個々の事業所の具体的な取組が促進されるよう事業を展開しているところです。

４．今治圏域における医療関係施設の充実について

先ほど知事も言われたように、防災であるとか人口減、子育て支援、これは重要な問題で、今治のことに置き換えて何が問題かというと、やはり医療関係の施設の充実かと思う。今年の３月ぐらいの愛媛新聞に、救急病院もどんどん減ってきており、松山から人を借りたり、医師を借りたりしながら回しているのが今治の現状だという記事も載っている。そのような中で、県立今治病院は昭和 58 年の竣工で、すでに 30 年を超えるような非常に老朽化が進んでいる。私も使う機会があるが、駐車場も非常に狭く利便性に欠けるところが難点かなと思う。県全体で見ると新居浜は県病院を新しくされると聞いているし、今治に関しても医療関係の充実を行うことにより、先ほど言われた防災プラス医療、人口減についても安心して暮らせる環境が整

えられるのではないかと考えている。そのあたりの医療に関して、県病院も含めて教えていただきたい。

【知事】

まず、愛媛県は長い県ですから、そこそこに拠点病院を整備する必要性があるのですが、その中心がやっぱり県の病院になります。それぞれ今治病院であり、新居浜病院であり、宇和島病院であり、八幡浜、いろいろ拠点病院がありますけれども。県になんぼでもお金があれば、一気にできるのですが、例えば警察署の場合は今治のほうが古いから今治優先で今治を先にやったり、病院の場合は建てられた年数でいうと新居浜が古い。今、新居浜に着手している。だいたい中央病院はめどが立ちましたので、次は新居浜。それがめどが立ったら次今治の検討に当然入っていくと思うので、それは限られた財源の中で計画的にきちんとやっていくということで、その年次は少しお待ちいただければと思います。

もう１つは、特に今治の場合は、島しょ部、山間部が多い地域になりますから、一番これから活用されるんだろうなと思っているのがドクターヘリコプターです。これは公約でもあったんですが、ドクターヘリコプターは是が非でもやりたかったんですね。ただ、問題は幾つかあって、医師が確保できるか。ドクターヘリコプターというのは、専用の機材を新たに整備して中に簡易な治療ができるキット、設備を整えて、しかも 365 日、医師と看護師２人が常駐するというこの体制が組めるのかどうかというのがポイントだったんです。ただ、夜間は飛べないんです。一応、航空法の関係で日の出から日の入りまでと決められているので明るいときだけになってしまうのですが、何とかめどが立ったので去年の２月にゴーサインを出したんです。もう１年経ちましたが、最初の年はどういうときに呼んだらいいかというのがまだ皆さん手探りだったので、それでも去年１年で 259 回出動しているんです。恐らく今年は 320 回から 330 回になろうかと思います。それだけニーズがある。それだけ人の命が助かる確率が上がるということなので、特に島しょ部、山間部ではこれが大きな力を発揮するのかなと思っています。こうしたことの充実性。これはこっちで出動したらこっちで飛べないということもあるので、先週、高知県と徳島県、香川県は持ってないんですけど、高知と徳島と県境での補い合い、助け合いというルールをつくって共同でやろうということになりましたので、県境を越えたドクターヘリの運航というのもこれから可能になってくるのかなと思っています。

それからもう１つは、医師の不足です。なんで医師が地域で少なくなっているか、確保しにくくなっているか。理由は簡単明瞭で、平成 16 年に国が研修医制度というのを大幅に変えたんです。それまでは研修医の方々は地域にまんべんなく行ってくださいと散らしてたんです。ところが平成 16 年からは好きなところに行っていいですよとなったんです。そうしたら東京とかに集中するに決まっています。瞬く間に地方で研修医がいなくなってしまった。これが実はこの正体なんです。でも、国というのは１回やったことの過ちはなかなか認めない。何度も言っています。これが原因ではないか。いやいや、そうではない。そんな繰り返しです。やっと来年ぐらい、ひょっとしたら、今後は地方の勤務をしないとある一定のレベル以上にはなれないという資格制度を検討していると聞いているので、ぜひやってくれと。そうすれば地方のお医者さんの不足も随分解消できると思っています。

ただ、そこまではほかの方法でやるしかないので、愛媛県では奨学金制度を立ち上げています。愛媛大学医学部と連携しまして地域枠というのを学生の枠の中につくって、卒業して医師の資格を取ったら、最低９年間地元で勤務してもらう。それを条件に奨学金の返還を免除する制度です。今順調に１期生がやっと出てきました。毎年これから 10 人ずつぐらいどんどん出てきます。彼らは最低９年、恐らくとどまると思うんですけど、愛媛でやってくれます。ＭＡＸ 190 人程度養成するとなっていますので、そこが愛媛県にどんどん出てくると、今治も南予も

含めてある程度医師の配置ができるようになると思うので。そこにさっき言ったような研修医の制度の改革があれば、何とかカバーできるのではないかと思っています。今はちょっと踏ん張りどころだと思っています。

５．成人年齢引き下げによる成人式の開催時期及び式での高校生の服装等について

各自治体に任せていることではあると思うが、2022 年に予定されている成人年齢の引き下げに伴う成人式の実施の時期について、市長の経験もおありになる知事の私見ということでも構わないのでお聞かせいただきたい。

３つ気になっているのが、通常、成人式は１月にされているが、成人年齢が 18 歳に引き下げらると、受験の時期に重なり出席人数が大幅に減少するおそれがあるので、夏に移行するのではないか。そうすると高校生が大半となるので、制服でいいのではないか。また、最後の改正年度は一気に対象が 18、19、20 の３学年にわたるので、衣装の問題、会場の問題、また業者の手配ということで大問題になるのではないか、と懸念されている。

最近の方は貸衣装について非常に早く動かれるので、あまり先のことでもないと思うが、成人年齢引き下げの中では小さい問題なので、あまり問題になっていないかと思う。確かに、成人式自体のあり方が同級会みたいになっているのではとか、華美になっているのではとか、格差がありすぎるのではとかいったことはあるとは思うが、私は、着物の正装の文化、振袖とかを支えているのは二十歳の女の子たちで、あの子たちがいなくなると着物文化はすごく大きく変わるように思っている。そういったところも踏まえて御意見をお聞かせいただきたい。

（司会）

質問が３つあると言われたのですが、１つは成人式の。

（参加者）

時期。成人年齢の引き下げがあって、18 歳が成人になりますから、今は自治体に委ねられているといえど、１月になされているところがほとんど。時期の問題。そうすると、高校生なので制服で出られる方が多いのではないかという問題。あと、改正年度は一気に対象者が３学年にまたがるので、そういった手配の問題。

ほかには、成人式は実際の成人と別個にして、やったらいいのではないかと私は個人的にそういったほうが混乱がないのではないかなとは思っているのですが、私は業界の人間なので。

【知事】

あまりそこまで考えていなかったのが正直。正直です。恐らくつくった国会も全然考えていないですね。これ。恐らく。非常に的確なポイントだと思うんですけど、受験時期。18 歳の成人式を法律どおりにやると、そういった問題も当然出て来るので、時期をずらすと高校生ばかりになってしまう。その通りだと思います。

18 歳から成人になる。だから成人式もこれにシフトしなければならないというところを切り離したほうがいいような気がするんですね。だから名前を変えちゃう。成人式から名前を変えて、“（旧）成人式”おしゃれな名前にして、二十歳で存続させるという手は１つあるのではないかという気はします。それが一番スムーズな移行だと思うような気がします。

（参加者）

私も賛成です。

【知事】

実は成人式はこれも市長時代ですが、当時、すごい苦慮していたんです。当時松山市ではコミュニティセンターというところで１カ所でやっていたんです。暴れるわ、暴れるわで。これは全国的な傾向だったんですが、紙を配ったら紙飛行機がボンボン飛ぶし。それでも僕はそういうの

嫌いではないから、おいとかってやっていたんですけどね。あるとき外でけんかとか問題を起こしていたので、さすがにこれはいかんというので、どうしようかといって、まず１回目はボーイスカウトの子どもたちの力を借りたんです。子どもたちにいっぱい会場に来てもらって、お静かにとカード持ってもらって。さすがに子どもたちにそれを持って回られるとみんなおとなしくなるんですね。それからトラブルなかったですね。でも、それでも全国的にこういう問題は起こっていたので、これを続けるのはどうかなと思ったので、あるときから校区別に変えました。ただ、このときに問題になるのが私立学校はどうなるのかと。校区またがって別の学校に行った子はどうなるのか、いろいろな問題があったんですけれども、それはもうある程度どちらにも行けるような仕組みにしたらいいのではないかということで落ち着いたんですが、これは成功したんです。さっきのまちづくりとの関連になるんですが、成人式の主催もまちづくり協議会なんです。さっきのまちづくりの計画の中で事業の１つでやっているから、ものすごい地域が手厚く、体育館でもちろんやるんですが、それ以来、一度たりとて問題が起こったことはないですし、参加率も上がったんです。それまで 40 何%が 50 ぐらいになった。地域ごとに事情が違うと思うので、どういう形の成人式がベストかというのは分からないですが、それぞれの地域の実情においてベターなやり方を求めて、中身もそうですね、やったらいいのではないかと思います。

ただ、さっきの日にちの問題につきましては、それは考えてみたらえらいものだなと。これは市町が主催するので、どうするか読み切れないところがあります。国でルール決めてしまうのかもしれない。それとも、国はしまったと思って地域の自主性に任せますと投げられるかもしれないし。これ、来てみないと分からないですね。

（参加者）

宙ぶらりんになって、こっちに聞けばあっちに聞けとたらい回しされるのが一番困る。

【知事】

可能性ありますね。

（参加者）

そうですね。

【知事】

地域ごとでいいというのであれば、僕が松山市で残っていたら、多分、名前変えて二十歳でやってしまうという選択をするかなという気はします。

（参加者）

混乱がない、歴史ある文化を守るという面ではいいような気がします。連綿と続いている文化。

【知事】

すみません。答えになってないです。

（参加者）

ありがとうございます。

６．少子高齢化に対する施策について

少子高齢化と言われる今の時代、私の住んでいる地域でも、25 年ぐらいまでは地域の運動会、カラオケ大会、盆踊り大会などがあったが、自治会などのお世話をする方が高齢になったり亡くなったりなどして、そういう行事がなくなっている。いろいろな理由で男性、女性とも結婚されない方がいたり、また空き家が増えている。自然には恵まれてるが治安が悪くなっているとの不安の声もあり元気がない地域になっている。自分自身はさまざまなボランティア活動に参加しているが、少子高齢化については個人の力ではどうしようもないので、どうしたら地域が発展するか、少子高齢化について知事のお考えをお聞かせいただきたい。

【知事】

今、日本全体の出生率が 1.45 ぐらいなんですね。数年前は 1.38 だったと記憶しています。その当時、1.38。正確ではないですが、単純に言えば２人のお父さん、お母さんに 1.38 の子どもさんですから、この状態が続くと人口がどんどん減っていくということになるんですが、本当にパソコンで今１億 2,000 万人の日本人が 1.38 の出生率がずっと続いたらどうなっていくのかというのを計算すると、800 年後に０になるんですよ。２人いなくなって 1.38 残るということですから、どんどん減っていく。そういう極端なことには現実にはならないと思うんです。これは単なる机上の計算なんですけどね。ともかく深刻なんですね。しかも今、１億 2,000 万人日本の人口がいて、30 年後には１億人になるだろうと。愛媛県が今 138 万人で、場合によっては 100 数万人ぐらいになるのではないかと言われています。そうなると、さっきのお話のとおり、まず社会保障制度が間違いなく崩壊する。もう１つは、日本国内のマーケット、市場が１億 2,000 万人のマーケットが１億人になりますから小さくなる。ということは、海外に出ないと会社の売り上げは軒並み下がっていく。とてつもないことが恐らくこれから起ころうとしていると思うんです。

さっき３つの視点でということを申し上げたのですが、人口の流出を食い止めること、人口の流入を増加することというのは、ゼロサムゲームで、国内でも取り合いですから抜本的な改善には全く結びつかないです。この地域のことの視点でしかない。抜本的な解決に結びつけるには出生率を上げるしかない。じゃあ、出生率を上げるためにはどうしたらいいか。

昔は産めよ、ふやせよ、という話が飛び交っていましたが、もうそんな時代ではない。自由ですから。ただ、１つ言えることは、僕らの世代というのは、世代ごとに違うと思いますが、男女ともに平均結婚年齢が 26 歳ぐらいでした。今、30 歳ぐらいになっています。４つ上がっているんですね。ということは、第一子が生まれる年齢が上がっているんです。26 歳で第一子が誕生する人と 30 歳で第一子が誕生するのでは全く意味が違って、第二子、第三子、もちろん経済事情もあるでしょうけれども、少なくとも最初の第一子を授かる年齢が上がることによって、第二子、第三子につながる可能性は低くなっていくということは間違いないと思います。ここに気づいたのがスウェーデンという国ですが、かつて出生率が 1.2 まで落ちました。ともかく結婚の年齢を引き下げる。いろいろな手立てをしながら結婚の年齢が下がったんです。今スウェーデンどうなったかというと、出生率 2.05 になったんですね。これは証明はできないですが、ヒントになると思いますね。

そこで、アンケート調査を見てみると、いろいろなアンケートありますから、なぜ 26 歳から 30 歳になったのか。もちろん女性が働くようになって社会参加がというのはあるんですが、一番の理由は出会いの機会がないというのが圧倒的に多いんです。アンケート見ると。出会いの機会がないんです。昔は出会いの機会もあって、しかも男女が出会うと、これは変な意味で取らないでください。僕らの時代は今とはずれているかもしれないけど、だいたい男性がプロポーズしてたんです。一緒になってくれと。正確には僕は嫁にはそういう言葉は使っていないけど、これが定番だったんです。今、男性すごく優しくて、場合によっては君について行きたいとか。逆のことも出てくるような時代になっている。出会う機会がない上に、結びつくエネルギーが弱くなっているとよく聞くんです。

そこで出生率を上げるためには、愛媛県としては何をしようかということで、前の知事が芽出しをしてくれたんですけども、婚活事業をやることになったんです。婚活事業をやってもなかなか最初成果が出にくい状況が続いていました。そこで現場が言ってきたのは、今の科学技術を使って、ＩＴを駆使してビッグデータを活用した婚活事業をやりたいと。結果を出せるかと聞いたら「出します。」と言うから、そこは予算を思い切ってつけたんですね。失敗したらこっちの責任ということで。見事にこれが当たりました。

どういうことをやるかというと、例えば、この人は５対５とか５人ぐらいの会だと自己主張

ができるけど、30 人の大きな会になると全く自己主張ができなくなってしまう。こういう人もいるんです。この人が両方とも駄目だけど、１対１であれば自分を表現できる。男女ともにそういう性格の違いがあります。それはデータの中に入っています。ちゃんと自己主張ができるような組み合わせをデータ間でやり取りして、地域であるとか業種であるとか、そういったものを組み合わせながらマッチングをしていくシステムをつくったんです。これをやっていたらカップル誕生率が瞬く間に上がって、今、愛媛県の婚活事業は 10 年目ですけども、ここで生まれたカップルが１万 2,000 組ぐらいになります。そこで県のほうに結婚しましたと報告があったのが、900 組ぐらい。結婚しても報告がない人たちもいますから、実際もっとあると思います。

これのカップル成約率があまりにも高いので、全国から教えてくれと来ました。去年から香川県、徳島県、高知県も愛媛のシステム。それは日本全国でいいことだからというので無料で、こういうふうにやっているからおたくもやったらということで導入が開始されています。全国でも 30 県ぐらいから視察が来ています。県が婚活事業をやるというのはいろいろな意見もあると思うのですが、本当にいいところ、かゆいところに手が届くマッチングによって、若いうち、ある程度年がいってもいいんですけれども、出会いの機会をつくるということは、出生率のプラスに必ずつながると僕は信じているので、これは充実させていきたいと思います。それから、あとは先ほどの働きやすい社会を呼び掛けることも出生率増加につながりますし、また紙おむつ等々の経済的な支援も結びつくと思いますし。まあ、答えはないのでやれることはいろんなこと。財源に限りはありますけど、やっていくことが大事だなと思います。

もう１点だけ。出生率を上げるための１つの切り口として、出会いの機会をつくって結婚年齢が下がっていくことで第一子誕生年齢が下がり、第二子、第三子につながっていく可能性が生まれることが１点と。もう１つは、先ほどのイクボス、ひめボスになるんですけれども、これもデータが出ているんですが、御主人が家事等々に協力的な子どもさんの世帯の平均人数と全く非協力的な世帯の平均人数は全然違うんです。２倍以上違います。御主人がそういうところでイクボス的なサポートをするところは、データ的にですよ。子どもさんが多いのはデータで出ているのは間違いないです。この２つがポイントになってきているのかなと思っています。

７．生名島の対岸の因島の港の整備について

上島町のいち住民として、対岸の港の整備をお願いしたい。

生名島は愛媛県の最北端で広島県尾道市因島と船が接続して、朝６時から 23 時まで約 20 分間隔で運行しており、先ほど、知事からお話があったように３年後には岩城島と生名島が橋によって供用開始される。現在も、行事がある際や日曜日等々は車の渋滞で島民も利用者の方も困っている。幸い愛媛県の方の各島は港はきっちり整備されている。これは愛媛県知事のおかげだと思っているが、広島県の港、特に尾道市因島は何もされていない。先ほど言った３年後には車の渋滞といったことが起こってくるので、対岸の港の整備、まず桟橋の整備、待合所の整備、プラス駐車場の整備をお願いしたい。非常に難しい話なので、知事にお願いしたい。

（司会）

対岸の港の整備。対岸というのは因島の。

（参加者）

そうです。

【知事】

何年か前に因島側の、何かガタガタなんで何とかしてほしいって、柔らかくアプローチした記憶があるんですけど、それはやってくれた覚えがあるんですよ。向かい側の広島とはしまな

み海道。しまなみ海道も最初、実は自転車の仕掛けをするときに広島はちょっと様子見だったんですね。ですから、御記憶があるか分からないですが、最初の高速道路を止めて自転車を走らせたのは愛媛側だけでやったんです。広島はちょっとまだ乗れないということだったので。それをやってみたらよさそうだ、というので広島も次からは一緒にやるということになって、今、広島もそういうふうな形で盛り上がっているので。そういういきさつもあるので柔らかく、これされたらいいですよねというような言い方で言うことはできるんですけど、なんせ広島の話なので、手は出せないですが、本当にしまなみ海道、これは共有で。とびしま海道、ゆめしま海道と。こういう海道が３つ揃うというのは、またこれいい話でね。ぜひ一緒にやりたいからこそ、お互い整備しようねという話はしたいと思います。今、自転車のブルーラインも共同でできるようになりましたし。ただ、広島の場合は山の方々と海の方々とだいぶ意見の違いがあるようで、そのあたりがすごい難しいんだという話は聞いたことがあるので。それはそれとして海のほうにもよろしくということは申し上げていきたいと思います。

ただ、いずれにしましても、広島とは防災の関係の協力もしかり、イベントのしまなみ海道を使った協力もしかり、いろいろな意味でかつてない関係ができつつあると思いますし。先日、関前のほうも菅市長も一緒に陳情して、水の問題、広島から水がもらえるようになりましたし。濃い関係の中で申し上げていきたいと思います。

８．関前地区の水の確保、航路、医療の維持及び紅まどんな栽培の取組みについて

今、知事が広島から関前へ水をもらえるようにしたという話をされていたので、お礼を申し上げたい。

元関前村では、代々の村長は水、そして船の問題、あと医療を大事にした。今現在、水のほうはおかげさまで関前の岡村、小大下までは広島の水が来るようになっており、大下では、海の塩水の淡水化でプラントを稼働している。船のほうは航路を従来どおり保っていただき、医療もへき地診療所がある。ただ、関前の病人は、ほとんどが今治市内のほうへ来ており、県病院も非常に受診率は高い。

以前、知事が大下へ来られたときに「活性化やりましょう。地域おこしやりましょう。」ということで、「東京のデパートでは紅まどんなは１個 1,000 円ですよ。それをつくりましょうや。」と知事がおっしゃり、今現在、元の関前村では紅まどんなを結構増やしている。儲かったという話は百姓はしないというふうなことを聞いているが、百姓はとにかく物をゼロからつくるわけなので、ある物を採ってくるわけではないので、結構経費はかかる。しかし、今年は儲かった、という話は出ている。

おかげさまで、皆、高齢者であるが頑張っており、80 代はまだまだ壮年。今、90 代が４人か５人関前におり、そういう連中が頑張っているので、今のところ、紅まどんなで地域おこしをという知事の激励をそのまま進めている。

水、船、医療の確保について、この関前の３島の住民が先ほどの少子高齢化で何年後に０になるか分からないが、今後ともぜひ続けていただければと思う。

【知事】

おととしでしたかね。ゴールデン連休のときに家内と２人で１泊目はしまなみで今治から大三島まで行って自転車で帰って来て、今治に１泊して２日目は朝早い船で岡村に渡って、そこからとびしまの一番向こうまで行って戻って来てふらふらになった記憶があるんですけど。とびしまはとびしまで特に愛媛側の近いところが環境がいいんですよね。自転車にとって。あと真ん中からは結構厳しいんですけれども。本当にそういう意味では船に乗ってサイクリングを楽しめるというので、あれもまた売りになるなと感じています。それは置いておいて。

水、今、大下は海水の淡水化ということなんですが、淡水化というのはコスト的には非常に高いですよね。これも松山市長時代なんですが、釣島という島があって、ともかく水が悲願。それまでは船で何度も何度も運んでためて、大事に大事に使っていたという生活から何とか脱出したいという要望があって。そこは位置的にも海淡しかないので、海淡やったことがあるんですけれども。今の技術を使えば、ミネラル成分を投入するので、普通の水よりもおいしい水ができるというのはあのときつくづく感じました。ただやっぱりどうしてもコストが高いというのがあるし、今後、機械のことですから更新時を迎えたときにどうするかということは出てくるかと思います。

農業なんですが、本当にどこ行っても言うんですけど、いろいろな人に出会って成功している人、たくさん見てきました。でも本当にみんな利益が上がっているとは言ってくれないんです。本当に見事に言わないです。厳しいときはすごい声が大きくなるんですけど。だから農業のイメージが、利益が出ても言ってくれないので儲からないんじゃないか、厳しそうだ、苦しそうだ、やめとこう。後継者が来ない。そこに最大の原因があるんじゃないかと考えたんです。

だから、収益上げている人はどんどん言ってくださいというので、今愛媛県では「えひめ愛顔の農林水産人」というのをつくりました。収益上げています、いいですよって言ってくれる人、手挙げてくださいって言ったら、今 153 人の方が「いいですよ。」って言ってくれて、私はこんなことやっています。１日の生活はこんなパターンです。収益はこれだけ上がっています。みんな出してくれたんです。そういう情報がどんどん出てくると、やり方によっては農業もいけるんだというのが見えてくる。そのときに初めて後継者というのが見つかってくると思うんです。これ地道にやっていきたいと思います。

その中で、やっぱり愛媛県ではかんきつについて言えば、大したもんだなと思うんですけど、先人たちが頑張ってきてブランド力がどんどん増してきた。そのブランド力をつくったのは、これまで皆さんたちがいいものをちゃんと市場に出してくれて、市場の評価がしっかりできているということにほかならないと思うんです。

かんきつについて言えば、もう１つ愛媛の強みは多品種というのがあるということです。これはみかん研究所の職員が日々頑張ってくれていますので、特に紅まどんなは 12 月１カ月しか採れないですけれども、年末贈答用として大人気で生産が追いつかない状況になっています。先ほど、東京で売ってたら１個 1,000 円と言いましたが、去年は 1,800 円。それから、もう１つは紅まどんなが終わったらいよかんが出てきて、その後に甘平が出て来るんですけど、紅まどんなは御存じのとおり品質保証品なので、光センサーで糖度と外見の傷も全部チェックしてクリアしたものだけが紅まどんなとして市場に出て行きますが、甘平の場合はその木からつくったら全部甘平ができてしまうので、バラツキが多過ぎると。最初のころは同じぐらいの値段だったのが、今紅まどんなが市場価格でキロ 1,000 円ぐらいだったかな。900 円か 1,000 円です。甘平が 500 円か 600 円なんで、差がつき始めたんです。もったいないなと思ったんです。同じように甘平の中から品質保証品。糖度と外見と玉の大きさ、クリアにしたものをよりすぐって、別の名前にしようということを 27 年から始めました。それが“愛媛Ｑｕｅｅｎスプラッシュ”という名前になります。これは今年３月に同じように東京で出してみたんですね。１個 3,500 円で売れました。

いいものっていうのは、その価値を認めてくれるお客さんが必ずいるので、愛媛のブランド力というのを大いに生かして、皆さんの収入につなげるようにやっていただきたいと思っています。ぜひ、後継者を探していただきたい。よろしくお願いいたします。

９．観光としての農業の可能性について

僕は、帰って来た後継者。もともと今治で、大学のときに出て、Ｕターンで帰って来て５、６年経つ。

今治市の玉川町という、道後から今治に抜けるところのトンネルを抜けたすぐのところでブルーベリーとマコモダケをはじめ特産品づくりから始まり、今はブルーベリーづくりに努めている。そこで農業を行っていて思うことが、愛媛にファンをつくるという意味で、県外に物が出ていったときにそれを食べてファンになってもらうようなものづくりを今後続けていきたいと思う。

最近、市場が、お金の使い方がどんどんモノからコトへと変わっていると感じる。行って物を食べたり物を買うというよりは、何かの体験だったり、自転車に乗って景色を見たりということにお金を使われる方が増えてきたと思う。農園の立地の関係もあって、サイクリングで道後温泉に泊まり、うちの農園でバーベキューなどして今治市に泊り、次の日にしまなみ海道を渡られるというサイクリングのお客さまが国内外問わずかなりいらっしゃる。そうなったときに農家として、ものづくり以外にも、この場所にいてできるファンづくりというか、観光という側面での農家の可能性というか、役割というものもこれから見い出していけば、愛媛のＰＲに僕らが何か力になれることがもっとあるのではないかと思っている。

ものづくりとは別の話になると思うが、観光と農業の組み合わせの可能性というか、知事とか愛媛県が今後思い描いている理想であったり、農家のあり方、農作物のあり方というのをファンづくりにつなげていくような話があれば教えていただきたい。

【知事】

お母さんですかね。

（参加者）

はい、そうです。

【知事】

１回ラジオで御一緒させていただいて。ブルーベリーの話を聞かせていただいたことがあるんですけれど。非常にブランド化がうまく確立されて、面白い取組みされているなというのが印象に残っています。場所もいいんですよね。ただ、松山から行く人はかなり脚力がある人だなと思うんですけど。

僕も何年か前に道後から自転車に乗って、石手川ダム上がって水ヶ峠上がってトンネル越えて、ずっと下りていく。しばらく行って足がガタガタになったので大西町に抜けるところを左折して。そしたらとんでもない坂で。そこで死んだという記憶があるけれども、風景としては最高ですね。そこはサイクリストとの連携を１つ考えられたらいいと思うし。

先日、内子町に行ってきたんだけれども、内子町でイチゴ狩りをやっている方がいて、ここは歴史があってこのままでは駄目だというので、山間部にあるんだけれども何人かが集まって土地をみんなで共同購入して法人にしてあらゆるイチゴをつくっている。イチゴだけじゃなくてモモも、ビワはこれから、ナシとリンゴと。季節によって何月から何月。イチゴはメインなんだけれども。今の季節はイチゴ狩りですよ。イチゴって言ったら“あまおう”とか“とちおとめ”からなんでもある。食べ放題。ものすごい人が来ているんです。だからまさにこれは観光と農業が一体となって、それ以外については産直市に出して収益を上げているというやり方をしていました。何とか狩りとの連携というのも１つの手だと思います。

モノからコトへということなんだけれども、でも結局、食べ物というのはくっついてくるんです。サイクリングに行っても景色を楽しむ、走りを楽しむもあるんだけれども、やっぱりおいしいものが食べたいというのは絶対付随してくるので、そこは絶対間違いないということで考えられたほうがいいのではないかというふうに思います。ですから、観光ということになる

と、そのところに行けばどんな面白いことが待っているのかなということの視点でアプローチしていけば答えが見えてくる可能性はあるのかなと思います。

もう１個は観光とは直接関係ないけれども、代行生産とか。ブルーベリー代わりにつくりますよ、東京の人とかに。あなたの区画はこれですよ。いつでもパソコンで自分の物が見れるようになっていて、生産から管理は全部こちらでやる。その代わり、これをやっているところも出てきているんだけれども、そういった活用の仕方で代行生産みたいな形で農園を使うというのも１つのアイデアかもしれないですよね。まだまだ工夫すればいろいろなやり方があるのではないかなと思います。

あともう１つは、愛媛県は営業本部をつくりましたので、そこが市場開拓とか、先鞭をつける役割を担っているので、これはいいなというイベントというか展示会行って、展示会じゃないな。例えば、いろいろなことをやっているんですよ。イオンの一番大きい千葉のイオンで愛媛フェアをやるとか。ＦＯＯＤＥＸのところで愛媛県のブースを構えて興味のある人出てこないとか。そんな呼び掛けがあるので。興味のある市場。これはという市場があるときはそういうのを活用したらいいと思います。

10. 生物多様性に優れた大三島の活用、盛港から中心部へのバスの整備及び大山祇神社の参道の活性化について

今治市は四国を代表する工業都市であるが、素晴らしい自然環境を有する町でもあり、愛媛県の特定希少野生動植物の保護区６カ所のうち、５カ所が今治市内にある。

中でも特に最近注目されているのが大三島で、建築家の伊東豊雄先生などをはじめとした方々の御協力で県内外の方々が訪れる、新しい店舗、施設が開業し、活気のある町となっている。私は、大三島の自然について２回調査しすごい生物多様性の島であると感じた。宮島のような天然の自然ではなく、農業や伝統的産業で里山と呼ばれる疑似的な自然が生まれてきたというもので、まさに名古屋であったＣＯＰ10 で日本が提唱した「SATOYAMA イニシアティブ」の見本のような日本の原風景が、大三島には残っている。

そこで 10 年前から島内の方々、農家の方々を中心に愛媛県からいろいろ御協力を得て、地域資源の大切さを伝えて保全する活動を展開してきた結果、大三島は日本の原風景が残る島として多くの方や外国人に知られるようになってきた。特に最近はアジアの方を中心に普通の水田の光景を見るために大三島の農家民宿を訪れるようになっている。

もう１点、大三島からフェリーでわずか 15 分で行けるところに大久野島という島がある。ウサギの島として年間 20 万人を超える観光客が集まり、宿泊施設の国民休暇村もあって、海外からもたくさんの方が訪れているので、伊東豊雄塾の方々と、日本の原風景が見える大三島のＡ5 版の冊子をつくって大久野島に置いてきた。ところが、フェリーの着く大三島の上浦町盛から大三島中心に行くバスの便がなく、外国から来た方も大三島に渡るのを諦めてしまう。昨年４月には土日祝日に三原から大久野島の高速船“ラビットライン”を開業しているが、残念ながら大三島には立ち寄っていただけない。

そこで、大久野島からの船便が大三島の宮浦港、表のほうに着くようにしていただいて、そこからバスを利用して大三島各地に行けるようになったら素晴らしい。それから歩いて大山祇神社に行くことで、現在、いろいろな店舗、施設が稼働し始めている大山祇神社の参道の活性化を図っていただければと思う。しまなみ海道とは違うまた別の二次交通ルートを開拓していただくことで、たくさんの方がそのルートを通じて愛媛県側にもっともっと流れてくると思う。

なかなか難しい問題だと思うが、これは大三島だけでなく今治全体の住民の思いでもあるので、ぜひ御配慮いただくようよろしくお願いしたい。

【知事】

大三島というのは、本当に大島ともまた違う、伯方島とも違う、それぞれ個性があって面白いなと個人的には思っているんですけど。去年だったかな。大三島、自転車で一周走ってみたけど、ちょうど 42 キロですね。マラソンと同じ距離で、マラソン大会やってみたら、走られたらとか。面白いと思ったのは、結構上り下りがあるんだけれども、岩田健母と子のミュージアムを下っていく坂なんかも絵はがきの世界で、あの風景は絶景ですね。下っていくと岩田健母と子のミュージアムがあって。

今日ちょっと行ってきたんですけど、伊東豊雄先生の塾生たちが、今治市がそこにお金を入れて改修して、宿泊所になって、ちょっとのぞかせてもらったけど瀬戸内海を見ながら風呂に入れたり。いや、これはおしゃれな空間ができているなと。多分、これは知られたら人がどんどん来るようになるなと確信した施設でした。あの小学校なんかは廊下がすごい長いので、宇和町でやっている雑巾がけレースができそうだなとか。ちょっとしたもの、見方を変えることによっていろいろなアイデアが浮かんでくるのではないかと思います。特に、大三島は何と言っても大山祇神社が存在する。日本の鎧の恐らく７割ぐらいは全部あそこにあるということ。あまり地元の人知らないですよね。しかも義経の鎧と、何といっても弁慶のなぎなたがあそこにあるということも愛媛県の人はほとんど知らない。もっと何かできないのかなと思いますね。すさまじいコンテンツ、人を引き付ける力を持っているものになるのではないかなというふうに思っていますので、そのあたりもぜひお考えいただきたいと思います。

ただ、今回あそこに行って、県外からの移住者、若い人たちも増えているなと実感しました。またこれから伊東先生がいろいろなことを仕掛けをすると聞いていますので、地元の方と移住者の皆さんが心合わせして、古民家などうまく活用していますよね。１つの成功例になってもらいたいなと思っています。

ちょっと船の便とバスは僕も現場がどうなっているのか分からないのと、まずは今治市の方針もまだお聞きしていないので、そのあたり知っていたら。誰か担当の分かる人いますかね。

（司会）

事務局の方、もしお分かりになればお願いしたいんですが。

（東予地方局総務企画部長）

総務企画部長の髙橋と申します。盛港のほうからバスがないというお話だったのですが、もともと盛港と宮浦港を結ぶバス路線というのがあったんですが、やはりバスに乗られる住民の方が減っていったということで、地域の中での協議の中でバス路線が廃止されたということがあります。バス路線も経営者側の事情もございますので、やはりある程度乗られる方を確保しておかないことには長く維持できていかないという理由で、そこが廃止になったと聞いております。

今治市内の公共交通の関係でございますが、今、ちょうど今治市の中で市内全域の公共交通網の再編に向けた協議を始められていると聞いていますので、そうした中で地域の交通をどうしていくのかということも検討されていくのではないかなと考えております。

【知事】

いまひとつ答えにはなっていない。

例えば、実はこれ先週か、四国知事会議でも議題に出したのですが、過疎地における交通手段の確保というのは生命線なんですね。そこでバスというのは１つの主要な手段にはなり得るんですが、が、ですよ。今言ったように、利用者が少ないと恐らく路線はなくなる。これは致し方ないことではあります。ただ、民間の路線バスという形もある。あるいは福祉バスという形もある。コミュニティバスという形もある。スクールバスという形もある。あるいは農作物を運ぶための移動手段としてのバスというのもある。実は日本の国というのは全部縦割りで、福祉バスだったら福祉バス以外の利用は決してやらせません、認めませんという制度なわけです。スクールバスは子どもたちしか運んではいけません。こういう制度なんです。空っぽなのに農作物を運んじゃ

いけませんという制度になっています。

そこで、そんなこと言っていたら、前に物事は進まないので、知事会で言おうと言ったのは、縦割りの種別のバス。これは地域に任せてほしい。こちらでも使えるし、こちらでも使えるし、こちらでも使えるという用途を自由にしながら、地域の責任で需要が少ないのをカバーできる可能性はあると思うんです。それを制度として認められたらいろいろな手立てができるのと、もう１つは、それこそ特区打って島はこういうのを自由にやらせてくれということを仕掛けていくのも１つの手かもしれないので。そのあたりはまた今治市のほうからアイデアが出てきたら、県の立場で何ができるかを考えていきたいなと思います。

11. 生名橋の車道幅が狭いことについて

島というところは、どうしても街と違って不便なところも多々あるが、逆に不便が故にそれを利用したコミュニティが充実してくるのではないかと思っている。

上島町では少子高齢化がすごく問題であり、待っていても人は来ないので、実際何ができるのか自分なりに考えた。せっかく、ゆめしま海道なりしまなみ海道という多くのものがあるのでそれを活用し、地域でそれぞれいろいろなことができる人と島々の方との交流を持っていくという、例えば島で写真家の人とかデザイナーの人だとか文章を書ける人を集めて、ちょっと盛り上がっていこうじゃないかというのを考えている。また、愛媛県は自転車にすごく力を入れていて、実際、私たちのところにもたくさんお越しいただいている。

１点だけであるが、島の人たちは自転車には乗るが、どちらかというとママチャリ系が大半でこういうスポーツバイクに乗っている方は少ない。岩城橋というのが完成予定で、橋を渡ってきたりすると思うが、乗っているのは軽トラだとか普通の車で、現在の生名橋はどうしても車道幅が狭いかなというのがあるので、まだ事故は起きていないが、もうちょっと道を広げてほしいと思う。

【知事】

まず、待っていても人は増えないというのは間違いなくて、そういう中で、へえっと思う成功例を時折見かけることがあるんです。

島根県ですが、そこの町や村、人口が増えているんですね。それはやっぱり秘密があって、例えば今日も議論していても少子高齢化、出生率が 1. 幾つ。人口がこのまま放っておいたら減る。例えば愛媛だったら 138 万人が 100 万人になる。という数字を聞いても人ごとなんですね。実感わかないんです。島根で何をやったかというと、集落ごとに今、これだけの人口がいます。この人口を減らさないためにはこの１年間で何世帯引っ張ってくればいいとか、集落ごとに小さい小さい目標を持っているんです。１世帯来てくれたらカバーできるとか。今年は２世帯目標にしようとかカバーできたら、ものすごい身近な数字の目標になるんですね。そういったあらゆる手立てで「わしの知り合いに声を掛けてみようわい。農業に興味があるかもしれん。」とか言ってみんなが動き始めて、それで人口を増やしたところもあるんです。だから意外なことかもしれないけれども、やっぱり地域のコミュニティの中で現実をみんなで共有して、現実的な目標というのが見えたときに、ひょっとしたら動きが変わってくるのかなということかもしれないです。そんなことを考えていただけたらまず１ついいのではないかと思います。

それから、逆に人数が少ないが故に、やれることがあるというケースがまちづくりにはあると思うんです。人数が多かったら一斉に同じことはできないんです。ところが、例えば上島に行ったら、お年寄りも何もかもひっくるめて、みんなクロスバイク乗っているとかっていったら全国ニュースになりますよね。それだけで。「なんじゃこの島は。みんな若いな。若いしかっこいいやん。」それだけで全国ニュースなんです。これも実はまちづくりなんですね。ほかがや

っていないことをやったら注目されることは間違いない。それは人を引きつけていく１つの力になる。

例えば愛媛県では、全国で初めて、最初は嫌がられたけど命を守るためだということで高校生にヘルメットをかぶってもらったんです。あっという間に全国ニュースです。視察もどんどん来ています。ほかがやらないことをやれば情報発信力が生まれる。それがより少ない人数のほうができる可能性があるという観点でものごとを捉えると、また違った姿が見えてくるのではないかという気がします。

最後の生名橋なんですが、これはちょっと前、僕が就任したときに架かった橋なんですが、実はあれは本当は２車線で広かったらよかったんですけれども、国の財政事情もあって、なかなかそれを求めると事業化ができないという状況だったので、ともかく橋を架けることを最優先だった。言うて 1.5 車線という。実現させるための苦しい判断だったと思うので、今すぐに広げるのはちょっと難しいと思うので、その中で何か工夫の余地があればと思います。

12. 玉川ダム湖を活用したボートレースによる地域活性化及び災害復旧対応について

鈍川温泉が近くにある山あいの小さい集落の非常に過疎化や高齢化が進んでいるところに、人に頼るだけではなく、私たちで何かやってみようと考え、15 人の仲間が集まって出資して茶屋を開き、10 年続いている。

去年はえひめ国体があり、近くの玉川ダムでボート競技が行われた。当初は正直実感がわかなかったが、開催が近づくにつれて地元でも非常に盛り上がり、じっとしていられない気がして大いに活気づいたように思う。ボート競技で訪れた方々やサイクリストから私たちの地域にいただいた恵みはお金に代えられないこの上ないものがある。

知事はスポーツ立県を目指されていると伺っているが、地域を支え地域に支えられ、地域とともにあるスポーツの視点も大事にしながら進めていただきたい。えひめ国体を契機として盛り上がった機運を消さないために、今後も玉川ダム湖を活用してボート大会をたくさん計画していただき、地域住民と触れ合う機会を多くつくって愛顔溢れる玉川地域を応援していただきたい。

えひめ国体のボート競技といえば渇水に随分悩まされたが、９月 17 日の台風 18 号の大雨でわずか数時間の間にダムの貯水率が 53%から満水となり、ボート競技は予定どおり 1,000 メートルのコースで行うことができた。

しかし、この集中豪雨で鈍川地区は渓流が氾濫し田畑に大きな被害をもたらした。玉川地区は過去にも死者を出す大災害に見舞われているが、雨の激しさはあのときよりももっと強かったように思う。地域の消防団の方々に定期的に見回りをしていただき本当に心強く思った。夜が明けて崩壊した谷間や田畑を目にしたときは今年の田植えどころか百姓はもうここまでかと諦めかけていたが、すぐ県や市の関係職員が現場を見に来て復旧作業を始めてくれたおかげで、現在は農地や水路のほうもほとんど復旧され、昨年の８割程度の田んぼの田植えができた。

先ほどスポーツで元気をいただいているという話をさせていただいたが、こういった災害復旧の面でも県や市の方々の熱意で素早い対応をいただき、施設や農地だけでなく生きる力まで復旧させていただいたように思う。今日はこの場でお礼を言おうと思って来させてもらった。

【知事】

鈍川温泉。あそこの前の渓谷がとてもきれいで、子どものころ、何回か行ってあそこの渓谷で泳いでバーベキューした記憶が残っています。あれは非常にいい空間だなと。面河渓谷に匹敵するような素晴らしい渓谷だと思います。昔は鈍川温泉は踊りとか歌とか、舞台があって、あれも子どものころの記憶に残っているんですけど。あそこの空間というのは、もう少しうま

く仕掛けるととてつもない温泉郷になる可能性はあると思います。位置的に。渓谷があって、ちょっと外れたところにある。ただ、今なんとなくバラバラにやっているような感じがするので、それはいろいろな考え方、経営者の皆さんあるので強制はできないけども、この温泉郷をどういうふうにしたいという、恐らくそういうのが好きな人から見たら、こういうのやったら面白そうだなというアイデアがいっぱい出てくる場所だと思います。かなり可能性が残っているのが鈍川温泉ではないかなと個人的には思っています。

さっきブルーベリーの、自転車で行ったと言いましたが、その後があって、松山から石手川ダムに上って。１人で行ったんです。嫁はあそこのコースは嫌だと言って。あまりにも急なので。水ヶ峠上ってトンネル越えて、玉川のあたりで休んで昼飯を食べないといけないので、まさに今お話しのふれ愛茶屋で食べようと上って行ったら休みだったんです。何も食べるものがなくて、大西の峠を上ったのでひっくり返った。思い出しました。その後行ったんですね。“この街で”を歌わせていただいて。本当に 15 人ぐらいですかね。皆さんが地域を盛り上げていこうといって一生懸命やっている姿が印象に残っています。

スポーツなんですが、アスリートを見るのも楽しいのは楽しいんだけど、やっぱり生涯スポーツで、みんなが自分たちの体力に応じて、少しでも体が動かせるものに関われるのが一番理想的だと思うんです。去年つくづく思ったのが、障がい者のスポーツ大会がありました。いろいろなハンディを背負っている方でも気楽にできる競技がたくさんあるというのを知りました。初めて見る競技もたくさんあったんです。あれはかなりお年いかれても無理なくできる競技がたくさんあるんです。こういうのを市町ごとにうまくみんなが楽しめるスポーツ環境を整えるということで障がい者スポーツの種目からヒントを得て、地域ごとにこんなのやってみないと広めていったら面白いと思ったんです。スポーツというのはするというのが一番楽しいですね。でも、見るのも楽しい。応援するのも楽しい。さっきの相撲もそうだったけど。支えるというのも楽しい。いろいろな楽しみ方があるので、それを地域ごとに環境を今の４つの視点でスポーツを捉えていって考えていけばいいんじゃないかと思います。

最後に国体というのは、本大会のほうはいろいろな競技が公式にできる設備が整えられたということだと思うんですね。国体の許可を得るためには競技団体ごとに、これだけの施設がこの競技ではないと認めませんというのが全部チェックされてきていますから、今愛媛県にある施設はほとんど全国大会ができる競技場になっているんで。これを利用しない手はないので、ボートだったらボート。それは西日本の大会でもいい、全国大会でもいい、学生の大会でもいい、そういうのを公式に認められている会場を利用して誘致することをそれぞれの自治体が頑張っていけば十分にそういう大会が引っ張ってこれると思うので、これは県も協力していきたいと思っています。